

国立遺伝学研究所の設立前後

溝口 元 (立正大学・社会福祉学部)

溝口元でございます。本日は「国立遺伝学研究所の設立前後」というタイトルでお話しさせていただきます。

はじめに

私自身のここ 10 年くらいの間のアーカイブでの研究経歴は、日本学術振興会からのサポートを受けまして、イタリア・ナポリの動物学研究所（通称、ナポリ臨海実験所と呼んでおります）のアーカイブ、ニューヨーク郊外に位置しますタウリー・タウンのロックフェラー財団のアーカイブ・センター、それからワシントン D.C. にあるカーネギー研究所のアーカイブ、そしてマサチューセッツ州ケープコッドのウッズホール臨海実験所のアーカイブ、の 4 つほどです。いずれも、1~3 か月くらいアーカイブ責任者（キューレーター）の方のアドバイスを受けながら所蔵資料を調査いたしました。質量ともに、多くもなく、少なくもない程度ではないかと思っております。若干の自慢といたしましては、ウッズホール臨海実験所に所蔵されておりました来所された際の昭和天皇の名刺を拝見させていただいたことをあげることができるかもしれません。これは 1975 年 10 月に訪米されたときのもので、警備要領とともに保存されておりました。

本日のこれまでのお話は国内の国立研究所に関したものでしたが、私が経験したロックフェラー財団やカーネギー財団のアーカイブは、民間非営利機関のもので、そこでは、財を成した人たちによる、いわゆる社会貢献（フィラソロフィー）と捉えられる活動が行われ、その一環として科学研究にも助成を行い、それに関する資料が残されているということでした。驚くことに、先ほどから、資料を捨ててしまう、残すということが話題がでておりますが、何故欧米人たちは捨てるということを知らないのかと思いたくなるくらい、とにかく資料が残されています。外国のアーカイブでは、どこでも日本に関係した資料は量的にそれほど多くはないため、すべて閲覧することが可能です。手紙の下書きから、費用の送り状、経費送金に関する外貨換算のメモ等々、捨てないところなるのかというくらい保存されていて、その度に感激し日本とは違うなあと感じたりしておりました。

第II部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

さて、本日のテーマの一つであるオーラルヒストリーについてのべたいと思います。オーラルヒストリーというのは、とりあえず聞き手と語り手が「語る」という作業を共有しながらひとつの歴史資料をつくっていくということだと考えております。その場合、一般には機関・組織に関係がある者、近くにいた方が行ったほうが事情にも通じ、内容も外部者よりもがわかるので好ましいと思われるかもしれませんが、しかし、関わった人だからこそ逆に見えにくくなってしまっていることや感情的な部分を含めてやりにくいことがあるかもしれません。外部の無関係な人間であるからこそ、ある意味、違った視点から押さえることができることもあるかもしれません。おそらく、関係者かどうかは、一長一短だと思います。

私の場合は、対象である国立遺伝研究所（以降、遺伝研と呼びます）には知り合いはおりますけれども、直接、遺伝研と関係したことはありません。このような人間が遺伝研の歴史について研究する際、遺伝研というのはどのようなところだったのだろうかということをもまず理解しておく必要があると考えます。その際、アーカイブに収められている一次資料などで枠組みを作っていく前に、すでに刊行されている物、出版物などの二次あるいは三次資料を利用して全体の概要を押さえることから始めてみてよいと思っております。これからの発表は、一か所だけ遺伝研に関する一次資料を使いましたが、あとは主に二次、三次資料を使いました。

国立遺伝学研究所の歩みに関する科学史的興味
遺伝研の歩みでどのようなことが科学史的研究上の興味となるのかについてですが、私の観点からは、このようなことを挙げたいと思います。

日本の遺伝学の制度化と研究所の設立

優生思想・「国民優生法」制定に対する態度

戦時下における遺伝学者の研究・存在意義

日本学術振興会との関わり

敗戦直後からの各機関等との交渉過程

科学による戦後復興、文化国家建設との関係

「財団法人遺伝学普及会」の活動

ロックフェラー財団、原爆被害調査委員会への対応

ミチューリン・ルイセンコ論争をめぐる

それぞれについて、若干説明を加えてみたいと思います。まず、日本における遺伝学の制度化と専門の研究所の設立にはどういう必然性、関連性があったのだろうか、ということです。つまり、制度史的な文脈からも関心があります。

第9章 国立遺伝学研究所の設立前後（溝口）

遺伝研の具体的な設立構想は1930年代から本格化するようになりました。日本では、1940年に「国民優生法」が制定されました。これは1933年にドイツで制定された「遺伝性疾患子孫防止法」というナチ時代の断種に関する法律を下敷きにしたような法律です。遺伝学と優生学が非常に密接な関係がある、あるいは関係があるようにみせるという時代状況でしたので、優生学に対して遺伝学者がどういう態度であったのかについては、面白い問題と思っております。

それから戦時下の科学者の存在意義についてです。これに関するプロジェクトは現在色々動いておりますが、これは基本的に数学、物理学、化学を専攻された理学部出身の方々のことを考えてみます。昭和18（1943）年以降になってまいりますと、戦時色が極めて濃厚になり士官を養成する陸軍士官学校や海軍兵学校が大量の生徒募集を始めました。当然ながら教える方の文官教官の数も増加しなければならなくなってきました。そこで、数学、物理学、化学を専攻した人たちは、工場など軍関係の兵器開発部門と同様に、こうした軍学校へ教官として赴任していきました。実際、敗戦後の新制大学の教養課程の数学、物理学、化学を担当された先生方で、戦時中に軍関係の学校で教鞭をとられた方はかなりいらっしゃいました。中には、それを誇りに思っていたことを述べていた先生も見受けられました。地学を専攻された方は、東南アジアや中国大陸に向いて資源探査の協力をしておりました。

このような雰囲気の中で、生物学を学んだ人たちは何をやっていたのかということが問題になります。大正末期から昭和初頭の帝国大学の動物学科や植物学科の出身者でちょうど私の先生の先生にあたる世代です。これまでにご本人から聞かせて頂いたり、体験談や回想録を読ませた頂いたものから理学部数学、物理学、化学、地学、生物学科の卒業生で実際に戦場に赴き、戦闘行動をとったのは、生物学出身者の割合が高かったのではないかという印象をもっております。つまり、生物学出身者は、戦争になったとき一体自分たちが何をしたらよいのか、あるいは、当時の風潮、国家からの要請、家族問題、生活問題から考えて、戦争へ行かず研究活動続けるために何をすべきか、ということは大変なことだったようです。人文・社会科学系でも同様だったと思いますが、たとえば、心理学者の場合、疲労、能率、注意力、適性検査などのテーマでかなり軍関係の研究所へ行って研究に従事された方々がいらしたことが記録上でもわかります。つまり、戦時中に生物学者、なかでも遺伝学を専攻していたひとたちは、どのような行動をとっていたのだろうか、戦争との距離はどうであったのだろうか、という疑問です。

ところで、1932年に「日本学術振興会」（以降、学振と呼びます）が設置されました。ここでは、遺伝学に対して特別委員会が設けられました。その委員長に就任された方は、国立遺伝学研究所の初代所長でした。この学振に関する資料を眺めておきますと、戦時中でも遺伝学にはかなりサポートがなされていることがわかります。学振の遺伝学に関する特別委員会は、昭和19（1944）年10月までは開かれており、さすがに昭和20（1945）年にはありませんが、21（1946）年6月には再開されております。いろ

第II部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

いろなディシプリンをみた場合、遺伝学は生物学の中でも、他の分野とはかなり違う様相を持っているようで、学振とのかかわりは面白いと思っております。

以上は戦時中までのお話しですが、戦後では遺伝研設立されるにあたり、文部省の科学教育局や占領軍の経済科学局（連合国軍最高司令官総司令部経済科学局、GHQ/SCAP-ESS）あたりと関わっていくわけですから、そこの交渉過程なども関心があります。

次に科学による戦後復興について。遺伝研は1949年に設立されました。この年に湯川秀樹先生（以降、敬称は略させていただきます）がノーベル物理学賞を受賞されました。当時の新聞や雑誌の論調を見てみますと、物理学者湯川秀樹と生物学者昭和天皇が面談された、などと書かれておりました。つまり、戦後復興や文化国家の建設は、科学によってなされるものであるという主張がありました。遺伝研の設立も同じような文脈の中で捉えることができるのかもしれない、という関心があります。

それから、遺伝研というのはいきなり国立遺伝学研究所となったというわけではなく、2年間ほど財団法人組織によって運営されておりました。「財団法人遺伝学普及会」は、ごく最近まで雑誌『遺伝』を発行しておりました。今さかんに言われている科学研究の説明責任（アカウンタビリティ）や社会的責任（リスポンシビリティ）、公共理解（パブリック・アンダースタンディング・サイエンス）など、税金を使って研究を行っているのであれば、その内容を社会に向かってきちんと説明しなくてはいけないというときに、遺伝研はこの『遺伝』という雑誌を媒体に行っておりました。現代との絡みからみても、面白いと思っております。

遺伝研の所長や所員といえますと、多くの方は小麦の起源の研究の木原均や生物進化の要因論で中立説を唱えた木村資生らを思い浮かべられるような気がします。特に木原均第二代所の時代に、ロックフェラー財団とかかわっております。今回のシンポジウムの会場となっているこの「国際文化会館」もロックフェラー財団がサポートしてつくられたものです。よく知られているのは、関東大震災で東京帝国大学の総合図書館が火災にあったときの復興にロックフェラー財団が多額の寄付を行ったことです。それから個人研究者としては野口英世に対して研究費の助成を、聖路加国際病院では看護教育などでサポートをしておりました。1920年代から30年代にかけては、公衆衛生院の設立、慶應義塾大医学部や東北帝国大学理学部にアメリカの生物学者を派遣しました。これらが代表的な、戦前の日本とロックフェラー財団との関わりでした。

戦後では、アメリカ文化の紹介などでも財団との関係が復興していきませんが、第二代所長木原均の時に関係が復活した理由がどのような事情のもとであったのか、占領史に関心がある方々や原爆の被害者との絡みからも関心を持たれることが多いようにみえます。1990年代からのヒトゲノム研究でも、アメリカではDOE（エネルギー省）という「マンハッタン計画」の末裔ともいえる部門で何ができるだろうかということで遺伝子に目をつけられたのが発端のひとつでした。実際、DOEの研究者は、広島へ

第9章 国立遺伝学研究所の設立前後（溝口）

来て被爆者と呼ばれる方やその子孫の方と、被ばくされていない方の DNA に違いがあるかどうかなどの調査に関する議論を行っております。このようなことから、遺伝、遺伝子、放射能の生物への影響ということで遺伝研と原爆被害調査委員会との関係にも興味があります。

最後にバイオポリテクスの問題についてです。科学とイデオロギーの関係ということを考えますと、遺伝学では、まず「ルイセンコ論争」が思い起こされます。メンデル・モーガン遺伝学という正統的遺伝学に対するソビエトの栽培植物から知られるようになった「新たな遺伝学」で、どちらが正統なのか議論があるわけですが、ここらが遺伝研をめぐる科学史、科学社会学、あるいは科学哲学と関連したテーマとして挙げるができることと思っております。

国立遺伝学研究所の歴史に関する関係者による文献

H.M（宮山平八郎）生（1948）国立遺伝学研究所設立残念記
（1）（2） 遺伝 2巻

H.M 生（1948～49）国立遺伝学研究所の設立に至るまで
（1）～（4） 遺伝 2巻～3巻

国立遺伝学研究所（1951）国立遺伝学研究所年報
第1号 昭和24～25年 沿革及び概説

国立遺伝学研究所（1954）『創立5周年』
財団法人遺伝学普及会

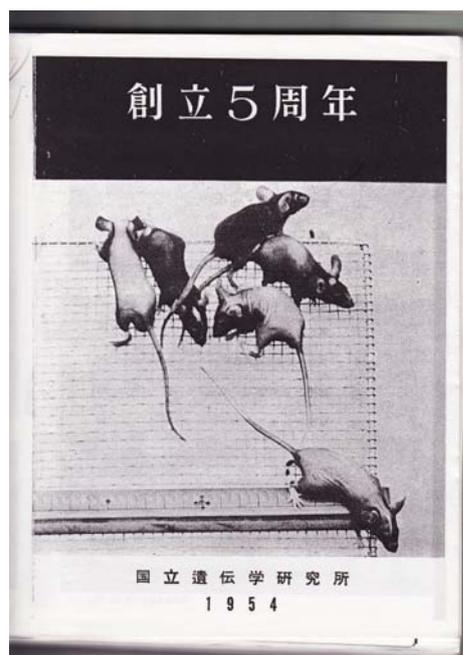
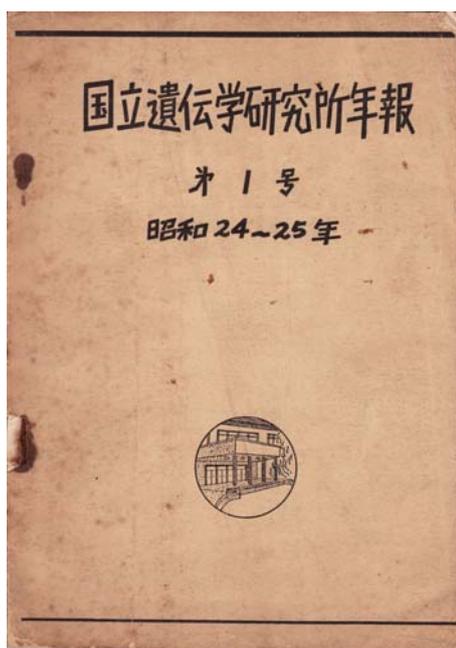
竹中要（1959）
『国立遺伝学研究所のできるまで国立遺伝学研究所生誕までの10ヶ年の回顧』
財団法人遺伝学普及会

舘野義男（2004）遺伝学研究所の歴史
『共同利用機関の歴史とアーカイブス 2004』
（総合研究大学院大学）所収

さて、遺伝研の歩みを調べる上で、ありがたいことは、遺伝研に関係した方がご自身で年史や文献を出していらっしゃるのだと思います。とりあえずの文献リストを掲げてみました。遺伝研の設立が微妙になったことに関係した記事は、当時、文部事務官として設立に尽くされた宮山平八郎という方が経緯を述べられております。最近では舘野義男教授が遺伝研の歩みを手短にお書きになられております。この中で私が気に入っている資料は『国立遺伝学研究年報 第一号』と『創立5周年』なのですが、とりあえず何が起こったのかという時系列的な事実経緯はこういった文書を見ればおよそのことがわかります。

第II部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

それから遺伝研には、「ゴールドシュミット文庫」というものがあります。ゴールドシュミットといいますのはユダヤ系ドイツ人で、アメリカで最期を過ごした遺伝学者なのですが、1920年代の半ばに、来日し東京帝国大学農学部で教鞭をとられた方です。このゴールドシュミットが所持していた学術論文のリプリントコレクションが遺伝研にあり、「ゴールドシュミット文庫」と名づけられているわけですが、かつて、「このようなものが遺伝研にあっても誰も見ないから捨ててしまえ」と言われた所長がいたそうです。つまり、歴史的に非常に貴重なコレクションでも、今の実験研究者からみるとあまり意味のない邪魔なものになってしまうわけです。あんな古い誰もみない雑誌論文をおいておくのであれば、新着のものをおいたほうがよいというような感覚でおられたようですが、さすがに捨ててしまうわけにはいかず、現在、遺伝研書庫の隅で埃をかぶっている状態です。ゴールドシュミットが所持していたスウェーデンの生物学者の論文別刷などは、両者がどのような関係であったのか、生物学史にかなりの理解がないと分析できないものと思えます。つまり、いくら文書を残すべきである云々と言っても、関心のある人が少ない場合はどうになってしまうのかという深刻な問題があるという気がします。



歴代所長の在任期間

次に、遺伝研の初代から5代までの所長の氏名と在任期間を掲げてみます。

第1代 小熊 捍 (おぐら・まもる)

1948年8月10日～1955年9月30日

第9章 国立遺伝学研究所の設立前後（溝口）

第2代 木原 均（きはら・ひとし）

1955年10月1日～1968年3月31日

第3代 森脇大五郎（もりわき・だいごろう）

1969年4月1日～1975年2月28日

第4代 田島弥太郎（たじま・やたろう）

1975年3月1日～1983年9月30日

第5代 松永 英（まつなが・えい）

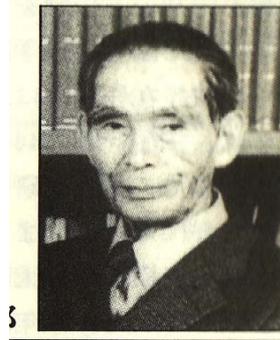
1983年10月1日～1989年9月30日

在任期間でみますと、ごらんのように1940年代、50年代、60年代、70年代、80年代という年代別のわかれ方となっております。ところで、遺伝研の所長の任期は一体何年であるのか。遺伝研の所員の方に聞いてみましたら、2期8年と理解しているということでした。4代所長の頃からそのようになってきたようで、所長に8年間以上就かれた方は人望があり、短くして辞められた方には何らかの問題があったという見方をするとよいかもしれないと笑いながら言っておりました。

ところで、ご存じのとおり、第5代の松永所長の時代に機構が変わり、遺伝研も総研大の生命科学研究科の遺伝学専攻という形になりました。遺伝研に関するオーラルヒストリーを行うときに、どういう事情で遺伝研ができたのかをおさえておく必要がある、ということであれば、第3代の森脇所長の時代までに基本骨格ができ、遺伝研究のノーマルサイエンス化、つまり、日常的な業務として研究者がそれぞれの研究を行うことができるような環境がつけられたと考えられます。ですから、ここでは第3代所長までの時期をみたいと思います。この写真が、初代から第3代までの所長の顔写真です。



小倉 捍
1885—1971



木原 均
1893—1986



森脇大五郎
1906—2000

第 II 部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

国立遺伝学研究所組織構想の変遷先ほど紹介させていただいたような遺伝研が発行している文書を見ますと、遺伝研の設立に関する経緯については、大体このようなことが書いてあります。

1939 年 6 月、第 12 回日本遺伝学会における小熊捍の構想

民族遺伝（人口問題、血液型、指紋、双生児などの遺伝研究）

実験遺伝（各種生物の交雑実験、系統保存）

細胞遺伝（染色体数研究）

↓

1947 年 5 月、財団法人遺伝学研究所設立時（所員 26 名、各地に分散）

遺 伝 学 部（部長：田中義麿）

生理遺伝学部（部長：駒井 卓）

細 胞 学 部（部長：篠遠喜人）

育 種 学 部（部長：木原 均）

人類遺伝学部（部長：古畑種基）

↓

1949 年 6 月、国立遺伝学研究所発足時（予算内の暫定的構成）

研究第一部 形質遺伝学 田中義麿

研究第二部 細胞遺伝学 小熊 捍

研究第三部 生理遺伝学 駒井 卓

先ほども少し触れましたが、組織の変遷をみていくと遺伝研は、1936 年 6 月に初代所長となる小熊捍が第 12 回日本遺伝学会において遺伝学に関する公立の研究所をつくるべきであるという構想を主張し、遺伝学会の委員会でも同意に達したということになっております。その頃は、優生学・優勢思想の影響が感じられ、民族遺伝（人口問題、血液型、指紋、双生児などの遺伝研究）、実験遺伝（各種生物の交雑実験、系統保存）、細胞遺伝（染色体数研究）の 3 つの部門をつくるのが述べられております。かなり煮詰まったにもかかわらず、戦争に入ってしまったために実現できなくなってしまいました。

第9章 国立遺伝学研究所の設立前後（溝口）

それから敗戦直後に再び計画が復活し、1947年5月に財団法人というかたちで遺伝学研究所が設立されました。当初は所員14名の規模でスタートしました。遺伝学研究所といっても一か所にまとまった研究所ではなく、各地に分散したタイプでした。所員が26名ほどになったときは、農学者、医学者、遺伝学者などのそうそうたる学者により、5つの幅広い分野から設けられました。そして1949年6月に3部門からなる「国立遺伝学研究所」が設立されたのでした。

遺伝研の文書でみると、設立の流れは以上ようになりますが、少し考えてみると研究所が設立されるということはひとつの学会で話しあったからできるとか、そういう事ではないのではないかと思います。科学史では、しばしば研究所をつくるような学界や社会の雰囲気があったとか、前例や前身が存在したとか、遺伝に関わるような研究所をつくるべしといった意見が複数あったからであるなどの指摘がなされています。

N. I. G. 談話室

昭和14年6月

特別號

国立遺傳研究所設立の提唱

小 熊 攄

世界は今や擧げて民族を中軸とした一大轉換に直面して居る。民族が血に繼がれた人類の集團である事を考へれば斯う云ふ時世が早晚廻つて來るのに不思議はない。生物が生きると云ふ本性を持つて生れて來た以上、そして殖えると云ふ本性に徹底的支配を受けて居る以上、そして更に同一血族が最も容易に集團生活を爲し得る以上、世界の有らゆる動きは當然一と先づは民族的なる諸項に歸納して考察されねばならぬ筈である。日本が聖戰三年に亙り尙ほ結束いよいよ堅く外國の反日工作日に新たなるに對して、能く敢然として自らを護り興亞の大業に邁進して居るのも詮じ詰めれば血の問題である。東亞の山野を紅に染めた同胞幾萬の血液は現に我々の血管に脉動する所の血液と同じ者である事を思ふとき五體の筋肉は自づから感激に戰く者がある。

中歐に低迷する暗雲も東歐を襲撃した雷雲も要するに發展途上に在る民族が共有する所の血の壓力でなくて何であらう。生きる力と殖える力はあらゆる障害物を突破して進む可き道を求めるにちがひない。それは凍つた水が鐵壁をも割る力を出すのと同じである。之れが自然の力でなくて何んであらう。

人類の集團が民族を土臺として成り立つて居る事が自然であり合理的である事を考へれば、其所に我々は如何にすれば自分の屬する民族が強化されるかと云ふ命題を見出すに違ひない。民族にとりて同民族の數の多いと云ふ事は確に一つの方と成つて居る。然し乍ら徒らに頭數の多いのみが唯一の方では無く、數の多い事と相待つて質の優れた事があれば其の力が數倍加される事を忘れてはならないのである。太古から榮えては亡びた各種民族興亡の歴史を生物學的に觀察すれば、榮えた時代には其の民族が榮え行く可き要因を備へ、亡びた時代には復たそれに相應して亡び行く可き原因のあつた事を見逃す事が出來ない。我々が民族として榮えて行く事は蓋し個人の幸福を招來するのであつて、自分の所屬する民族の優勢なる事を希はぬ人々は個人の幸福をも捨て去る程の愚者と云はねばならないのである。

第II部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

民族衛生學講座と研究機関の設置案

學術振興會の6月23日の理事會で、民族衛生學(優生學)講座の設置に關する案は、民族の肉體的のみならず、本能的、精神的素質の優秀化を急務とする現下の狀勢に鑑み是非とも早急に研究を促進させ、統一する要ありと滿場の意見一致し、單に講座の設置に止めず更に擴大強化したものにする必要ありとし、7月に開かれる理事會で更に検討し具體的成案を決定する事になつた。

國立遺傳學研究所の創設を要望する

紹介

人類遺傳學叢書 が川上理一氏の監輯で東京市本郷區金原商店から刊行されることになつた。その第一冊として、鈴木安恒氏の“聾啞の遺傳”が出た。續いてどしどし刊行されることを希望する。

遺傳・育種學叢書 が木原均氏の編輯で東京市本郷區養賢堂から刊行されてゐる。これはすでに第11輯まで出てゐる。

育種通報(Plant Breeding News)が寺尾博氏の編輯で同上から刊行されてゐる。

植物學綜説 が篠遠喜人氏の編輯で東京市日本橋區内田老鶴園から刊行され、すでに第7冊まで出てゐる。

さて、遺傳研の設立を謳った初出の公的な文書は、「N.I.G.(日本遺傳学会)談話室」に載せられたひとつの記事ということになっております。1939年に開催された第12回日本遺傳学会大会(東京)で配られたニュースに「國立遺傳學研究所の創設を要望する」と記載されておりました。これは「遺傳學雜誌」という日本遺傳学会の機関誌に差し込こまれたパンフレットのようなものです。しかし、その他にも、以下のような文書があります。

優生學・遺傳學に關する研究所の設立構想 - 1 (池田林儀)

池田林儀(1927): 國立優生相談所設置の急務 優生運動 2卷12号

「遺傳的疾患素質の傳承者は、自分自身も不幸であるが、その子孫もまた不幸あり、また社会にとりても不幸である」。産兒制限は「断じて民間有志の手によつてなさるべきものでなく、國家の權威を以て行ふべきものであると信ずる」。「優生相談所は、民族優化のために設立する機關である」。「少くとも次の組織を以てこれを整備しなければならぬ。一・記録部(家系・血統) 二・安心部(結婚相談) 三・保健部(社会醫學の普及發達) 四・診療部(産兒制限と墮胎手術)」

第9章 国立遺伝学研究所の設立前後（溝口）

たとえば、その10年ほど前に池田林儀という東京外語出身のジャーナリストで、報知新聞の記者が、ヨーロッパの特派員だったときにヨーロッパの優生思想、優生学を知ったようです。そして、これは日本でもやったほうがよいのではないかと考え日本へ帰国してから運動をおこしました。この池田という人は、実は大隈重信がサポートをしていた人でもありました。「優生運動」と題する雑誌を発行し、その2巻に「国立優生相談所の設置の急務」というタイトルで記事を寄せております。これは恐らく遺伝学・優生学に関係した施設の設置についての最初期の文書ではないかと私は考えております。内容として、この施設には記録部、安心部、保健部、診療部の4部を置くことが提案されております。

優生学・遺伝学に関する研究所の設立構想 - 2（駒井 卓）

駒井卓（1930）：優生学研究所『生物学講話』所収

「私の頭の中にあるのは、大体米国コールド・スプリング・ハーボアのカーネギー財団経営の「優生学資料局」に似たやうなものである」「家系の調査、人間の種々の性質及欠陥の遺伝の研究、及結婚出産移住死亡等に関する優生学的研究等である」「一．日本人の体質に関する資料。体質人類学の方面。二．日本人の心理に関する資料。心理学的の種々の計測。三．日本人の人種に関する資料。民族がどれ程迄混血種であるか等に関する資料」

日本の代表的な遺伝学者であり、後に遺伝研の所員になられた京都大学の動物学者、駒井卓は、『生物学講話』と題する単行本の中の「優生研究所」という章で研究所の設立について述べております。駒井はアメリカのコールド・スプリング・ハーバーにカーネギー財団がサポートしていたユージェニック・レコード・オフィス、「優生学資料局」という部局・研究所があったのですが、それに類したものを日本でもやってみてはどうかという主張をしているように見えます。そして、体質人類学、心理学、人種学の3つの部門をもった研究所をつくるべきであると述べております。先ほどの池田林儀は国で研究所を設けるべきであると考え、駒井卓は民間でつくるべきである、と設置母体については考えが分かれておりました。

優生学・遺伝学に関する研究所の設立構想 - 3（生物学者）

メンデル会（藤井健次郎・篠遠喜人ら、1935年頃）：遺伝学研究所設立趣意書
NIG 談話室 6号

遺伝学の発達が齎せたもっとも大きい功績は、「素質不良なる者は如何にこれを教育しても、ある程度以上善良にすることは不可能であるということ、更に又優良なる素質を選択して行けば、将来に於いて極めて優秀なる民族を形成することが可能であることを明瞭に認識せしめたことである」

第 II 部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

「...民間の理解ある人々の寄附によつて、敢えて遺伝学研究所を設立し、斯学の進歩を図り、文化の向上、国運の発展に寄与せんと欲するものである」

今度は、植物学者の場合です。1918年、東京帝国大学理学部植物学科において寄附講座により初めて遺伝学の授業を行った藤井健次郎および、彼の門下の篠遠喜人の2人により、1935年頃「遺伝学研究所設立趣意書」というものが出されました。ここでは「...民間の理解ある人々の寄附によつて、敢えて遺伝学研究所を設立し、斯学の進歩を図り、文化の向上、国運の発展に寄与せんと欲するものである」としていました。非常に優生思想の濃い主張をしていると感じます。

なお、日本の大学における遺伝学の講義は、1913年に札幌農学校の後身の東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）において、田中義麿が科目として「遺伝学」の講義を開始しております。イギリスでは、ケンブリッジ大学でベーツソンが1909年から講義を始めたとされており、日本がとくに遅れていたといことではなかったこととなります。

日本遺傳學會 會員名簿

(附 役員及會則)

昭和15年12月

日本遺傳學會

(東京市本郷區 東京帝國大學理學部植物學教授)

科 學 報 國

I 全日本科學技術團體聯合會

(東京市麴町區大手町 企畫院科學部 兼付)

— 加 盟 —

II 財團法人科學動員協會

(事務所 東京市麴町區丸ノ内1丁目2
日本工業俱樂部 内)

— 加 盟 —

III 日本國民優生聯盟

(東京市麴町區大手町 厚生省豫防局優生課 兼付)

— 創立次第加盟 —

日本遺傳學會は

進んで諸學會と協力し

科學報告を實行す

この図は、1940（昭和15）年に発行された日本遺傳学会の会員名簿です。左側が表紙で、次をめくると「科学報告」というところに「日本遺傳学会は進んで諸学会と協力し科学報告（ママ、報国？）を実行す」というように戦時色が濃厚であることがわかるかと思えます。日本遺傳学会は、1920年に設立されました。設立時の会員とこの1940年の会員名簿に載っている方々を比べてみますと、もはや初期の会員の方の多くがリタイアされたか、長老になられており、代替わりが明瞭にみられるということです。つまり、もともと育種学から派生して始まった日本の遺伝学で研究所を設立しようという機運が高まってきたときには、食糧増産や品種改良のような実践的なものから抜け出してきていたことがこの名簿の会員の推移からも窺われるかと思えます。

優生学・遺伝学に関する研究所の設立構想 - 4

小熊捍（1941）：『日本遺伝研究所設立の提唱』

序、一．種族は血で結ばれてゐる 二．種族は優秀化されなければならぬ 三．生物としての人的資源 四．人間の食物全部は生物である 五．遺伝現象の重大性 六．研究と応用とを分業化することは能力増進の根本 七．遺伝の基礎研究がもたらした貴重な応用の実例 八．理想の世界 九．いかなる遺伝研究所を設置すべきか（イ．遺伝研究所の三部局：民族遺伝、実験遺伝、細胞遺伝 ロ．他の国家機関と切り離して独立の機関とする：内閣直屬） 十．結論

さて、優生学・遺伝学に関する研究所の設立構想で4番目にでて次にでてくるのが1941年に発表された小熊捍の『日本遺伝研究所設立の提唱』と題した小冊子です。その中の「九．いかなる遺伝研究所を設置すべきか」では、以下の2点について述べられております：(1) 遺伝研究所の三部局：民族遺伝、実験遺伝、細胞遺伝を設けること、そして(2) 他の国家機関と切り離して独立の機関とする：内閣直屬とすること。遺伝研究所の所轄は、文部省であったわけですが、当時の農林省とも厚生省とも離れたところで作るということが、当初から構想されていたということがわかります。

駒井卓（1942）「大東亜戦争と遺伝学」

「何と云つても開戦以来の皇軍の活動はすばらしい。日本人の最大の長所は此の勤勉と努力と負け嫌ひであると云つてよいだらう。育種とか栽培とか畜養とかの方面を担当する遺伝学の仕事は生物学の中でも、殊に多いと云はねばならぬ。遺伝学の画期的業績は、奇妙に甚だしい不利な条件の下でなされたものが多い。Mendel, Darwin, Bateson, Morgan 尽くそうである。臥薪嘗胆しても、大いに努力したいものである」(1942年2月刊、NIG 談話室9号)は駒井卓

生物学者の戦争協力という問題ですが、資料がないと何をいったかわかりませんが、あると少なくともこれは行ったということが具体的に指摘できます。1942年度の日本遺伝学会会長に就いていた駒井卓は「大東亜戦争と遺伝学」という一文を発表しております。この中で、遺伝学の画期的な業績は、奇妙に甚だしい不利な条件の下でなされたものが多い。Mendel, Darwin, Bateson, Morgan らは、尽くそのようである。臥薪嘗胆しても、大いに努力したいものである。つまり、我慢したもののほうが優れた研究が生まれ、お金があって裕福だと逆にたいした成果がだせない、と言っているようにも思えます。

田島弥太郎（1942）「ナチスの世界観教育と遺伝学」

ナチスの世界観とは、「ドイツ人の為のドイツ国家建設」、「ドイツ国をして今日の窮境に陥れたマルキシズムを撲滅し、ユダヤ人を退治する以外にドイツの崩壊を防ぎド

第II部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

イツの再建をはかる道はない」。ヒットラーユーゲント指導者学校では、「遺伝病者防止の手段等々が青少年の愛国の熱血を沸き立たせながら次々に教え込まれていく」、「我々遺伝学徒の使命が如何に重大であるかを痛感せられるのである」、「我々は遺伝法の認識と之に対する正しい運用は必ず民族の運命を決定するものであると信じて居る」（1942年2月NIG談話室9号）。

のちに遺伝研第4代所長に就任した田島弥太郎は、戦時中にはこのようなことを述べておりました。ナチス・ドイツ時代の優生思想を強く感じさせるこうした資料から、遺伝学者がどのように優生学に関わったのか、少なくとも部分的にはイメージすることが可能であると感じております。

小熊 捍（第一代遺伝研所長）

科学史や科学社会学では、師弟関係や人脈のつながりを重視しております。遺伝研の初代所長の小熊捍の場合にもその見方ができると思います。そこで、彼の経歴をみていきます。

1911年 東北帝国大学農科大学農学科（北海道大学農学部の前身）卒業。松村松年（1872 - 1960）に指導を受ける。トンボの分類が当時の専門。松村著『日本昆虫記』（1898）に感激して入学。

松村は、1906年ショウジョウバエ命名。1924年の移民制限法（排日運動）に反応して、『進化と思想』（1925）を著し、民族間の生存競争の必然性を述べていた。

1919年 「カイガラムシ外部形態、内部器官の組織学的研究」で学位取得（八田三郎が指導）。動物学教室助手、助手として最初に指導したのが木原均の学年であった。この頃から染色体研究。1922～25年、欧米に留学。

1929年 北海道帝国大学農学部教授。1937年から43年までの6年間、理学部長に就任。「日本には教える場所はあるが、研究者が自由に研究できる場所がない」と感じ、研究施設建設に精力的に取り組む。低温研究所（1941）、触媒研究所（1943）初代所長。

1939年 「国立遺伝学研究所設立の急務」、10月13日第12回日本遺伝学会役員会で提案。

1941年 日本遺伝学会会長。

1946年 日本遺伝学会に「国立遺伝学研究所設立準備委員会」発足。

国立遺伝学研究所長（在任期間：1948年8月10日～1955年9月30日）。

1954年11月4日 天皇訪問に対応。

第9章 国立遺伝学研究所の設立前後（溝口）

小熊は、札幌農学校が東北帝国大学農科大学に改組された頃の卒業生です。彼の恩師は、札幌農学校で昆虫学を講じていた松村松年でした。遺伝学の主要研究材料といえば、ショウジョウバエが頭に浮かぶと思いますが、この「ショウジョウバエ」の命名者が遺伝研初代所長の恩師の松村でした。ショウジョウバエは、1933年に遺伝学の領域で初めてノーベル生理学・医学賞を受賞したアメリカのモーガンが材料として使っていたことでよく知られるようになりました。

さて、松村には『進化と思想』と題する著作があります。この中に、民族間の生存競争の必然性を説いたり、アメリカにおける排日運動を激しく批判した箇所があります。興味深いのは、ドイツでは「黄禍論」があったけれども、研究者に対しての迫害はなかった。ところが、アメリカではこうした配慮がない。アメリカの排日運動とは何であるか、ひどい、民族間の生存競争が必要である、ということを厳しく訴えておりました。今日的な見方をすれば、反米的な愛国主義者で優生思想の持ち主であったような印象をもってしまいます。小熊と松村が一緒に写った写真を多数みかけることができますので、そこから良好というか濃密な師弟関係が窺われます。

もうひとつ、小熊は東北帝国大学農科大学からさらに改組された北海道帝国大学に在職中、研究者が自由に研究を行うところがないということをししばしば訴えておりました。現在も北海道大学に付置されている低温研究所や触媒研究所、それから厚岸にある臨海実験所などの設立のすべてに小熊が関わっており、初代所長を務めたものもありました。つまり、遺伝研初代所長は、研究所を設置することに対し、大変な理解と情熱があり、この種のノウハウをもっとも身に付けていた人物の一人であったということでもあります。小熊は、遺伝研ではヒガンバナの研究で知られ、遺伝研でおそらくもっとも知名度が高い生物進化の「中立説」でよく知られる木村資生の上司でもおりました。

また、小熊と優生運動の関係を検討する際の資料も存在します。それは、さきほど述べました池田林儀の「優生運動」に「日本優生運動協会賛助員」という名簿が掲載されております。ごらんのように、しっかりと小熊捍の名前をみることができます（上段真中）。その他、遺伝学に造詣が深かった石川千代松や遺伝統計の研究がある川上理一、小熊の恩師の先ほどから言及しております松村松年、植物学者の三宅驥一などの名前が見られます。あとは心理学者の高島平三郎や教育学者・教育官僚の澤柳政太郎、政治家の鳩山一郎なども載っております。ある意味で、優生運動に対して当時の知識人や有力な研究者たちは、深く考えて決断したとか、強い信念があったから関わったという感じはなく、妙なたとえかもしれません、有名税のような感じで名を連ねていたような気さえしてしまいます。ともかく、この名簿は、当時有力な学者たちの優生学への関与の仕方の一事例であるともいえます。

第II部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

日本優生運動協會賛助員																									
醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	大日本雜辯會主幹	法學博士	陸軍少將	理學博士	日本麥酒常務取締役	農學博士	醫學博士	法學博士	貴族院議員	文學博士	經濟學博士	法學博士	文學博士	農林大臣	侯爵							
戸田正三	田所良吉	佐多芳久	岡本京太郎	野間清治	林毅陸	山田軍太郎	石川千代松	植村澄三郎	小熊程	越智眞逸	下村宏	北條時敬	三宅雄二郎	太田正孝	添田壽一	澤柳政太郎	町田忠治	大隈信常							
文學博士	衆議院議員	文學博士	醫學博士	醫學博士	第一外國語學校校長	陸軍中將	醫學博士	醫學博士	三益製紙會社社長	三井信託會社社長	實業之日本社社長	富山房社長	文學博士	農學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士							
中島藏	高島平三	松田源治	笹川種治	福田志郎	上野小波	巖谷知至	堀内文次郎	高田研安	近藤次繁	田原梅吉	米田義一	坂本嘉治馬	村上直次郎	時任一勝	田口勝太	清水多榮	川上理一	阿部勝馬							
衆議院議員	陸軍少將	海軍少將	奈良女子高師校長	井横半鶴	久山澤見祐	出光榮輝	鶴田元道	新輪直和	伊藤長七	山内繁雄	田中義麿	三宅驥一	多賀宗之	松村介石	西田次磨	梅原信世	澁谷壽雄	鳩山敏郎	生方一郎	吉澤三郎	井口實三	松村松年	今村力三郎	菅沼清次郎	三宅米吉
(承諾願以下次號)																									

国立遺伝学研究所に関係した遺伝学者とルイセンコ論争との関係
 もうひとつ、遺伝研が設置される以前のことについて述べておかななくてはならないことは、「ルイセンコ論争」だと考えております。遺伝研にとっては、この論争が非常に都合のよい時起こったようにみえます。逆に述べますと、遺伝研が設立されてからルイセンコ論争が起こっていれば、とても大変なことになっていたのではないかと思います。そこで、遺伝研の設立とルイセンコ論争との関係をみていきたいと思ひます。

1947年10月、日本遺伝学会第19回大会でルイセンコ遺伝学説紹介。ミチューリン・ルイセンコ支持派 vs. メンデル・モーガン支持派。この時、駒井卓が「学会は自身のデータを発表し議論をする場である」と主張した。

1948年3月、雑誌『遺伝』は、座談会記事「新しい遺伝学批判」を掲載した。出席者は、田中義麿（研究第1部）、竹中要（研究第2部）、山下孝介、増井清、篠遠喜人、和田文吾、古畑種基らであった。

ルイセンコ学説を政治と切り離して論じるべきという考えを強調（田中義麿）した。「科学的の学説といわれるべき資格を欠いている」（駒井卓）と述べている。

第9章 国立遺伝学研究所の設立前後（溝口）

1948年7月、木原均、戦後渡航科学者第一号、第8回国際遺伝学会に参加。そこで、マラーのルイセンコ非難演説を聴く。

1949年5月、「遺伝」で駒井卓は、ルイセンコ批判の急先鋒に。科学理論批判というよりも、バビロフ（ベーツソン門下）肅清のような遺伝学者の迫害に対して。

ルイセンコ論争の内容自体については、最近、新版が出版された中村禎里著『ルイセンコ論争』などを参照していただきたいと思います。ここでは、遺伝研の関係者のこの論争に対する態度や振舞いについて述べます。ルイセンコ論争は、1947年10月に開催された日本遺伝学会第19回大会で勃発したと捉えられております。財団法人遺伝学研究所が設立されてほどない時期です。このときの学会会長の駒井卓は「学会は自身のデータを発表し議論をする場である」と主張しております。つまり、今日の研究所の研究員に近いメンタリティーがこの時代にみられるということです。これは面白いと思っております。そして、当時の遺伝学者でミチューリン・ルイセンコの主張は、科学的に考えて腑に落ちない、変であると思っていた人たちが少なかったようです。

どこがそのようであったのかということについては、論争がみられた翌年の財団法人遺伝学普及協会の雑誌『遺伝』に掲載された「新しい遺伝学批判」と題する座談会の記事などから窺うことができます。この時の出席者の田中義麿、竹中要、山下孝介、増井清らは、全て次の年の1949年に設立された国立遺伝学研究所の所員になった人々です。財団法人遺伝学研究所の所員という、身内で固めてミチューリン・ルイセンコの主張をこき下ろしているという感じでした。結局『遺伝』という発表媒体をにぎっている遺伝研の人たちは、その後もルイセンコ論争に対する批判をおこなっております。

最後は凄く、1950年には、とくに獲得形質遺伝肯定論者の考えに対して、吟味に耐えないという主張もみられます。これらをやや乱暴ですがまとめてみますと、遺伝研の設立は「反ミチューリン・ルイセンコ」「親メンデル・モーガン」の捉え方を共有する人たちによって推進、実現して行った。「ルイセンコ論争」が遺伝研設立にとって「露払い」の機能を果たしたのではないかということでもあります。こうして、1949年6月10日、国立遺伝学研究所が設立されました。そして、小熊初代所長という遺伝研にとっての適材が設立当初の運営・管理にあたっていたと考えております。

木原 均（第二代遺伝研所長）

つぎに、社会的には戦後復興が順調に進行していた第2代所長時代をみていきたいと思えます。

1917年 北海道帝国大学農科大学農学科卒業。学部では、郡場寛指導、植物生理学専攻した。大学院では、郡場が海外留学のため宮部金吾の指導を受ける。

第 II 部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

1920 年 京都帝国大学理学部助手（群場と共に赴任）。
京都帝国大学農学部設立と同時に助教授。

1924 年から 3 年間、欧米留学、ドイツではコレンスの下に。
帰国後、教授に就任し、日本初の「実験遺伝学」講座担当。

1946 年 日本遺伝学会会長。

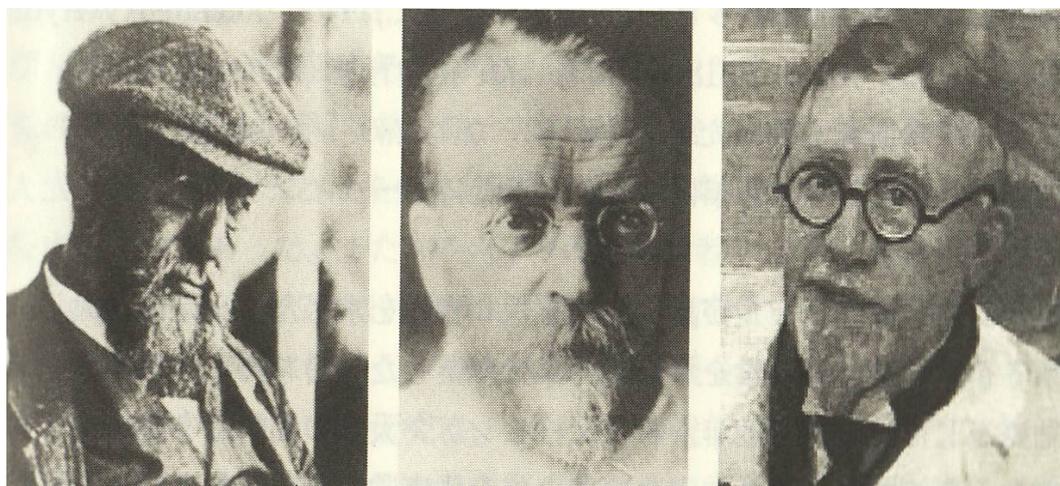
1948 年 第 8 回国際遺伝学会出席（ストックホルム）、戦後初の科学者の海外
渡航。

1956 年 京都帝国大学定年退官。

1956 年 国立遺伝学研究所長（在任期間：1955 年 10 月 1 日～1968 年 3 月 31 日）。

1956 年 4 月 20 日 天皇来訪に対応。

ご存じのとおり、メンデルの遺伝の法則は、彼の存命中は実質的に無視されていて、1900 年にここに掲げましたオランダのド・フリース、ドイツのコレンス、オーストリアのチェルマックらによる再発見がなされてから広まったということになっており
ます。



この 3 名の内のコレンスの下に留学していたのが、遺伝研第 2 代所長の木原均でした。彼は、コレンス以外にも再発見をした人たちと会っております。つまり、メンデルの遺伝の法則再発見の当事者 3 人全員と面会したことがある日本人研究者が木原なのです。他にもいらっしゃるかもしれませんが、明言されているのは彼のみです。つまり、このことは 20 世紀初頭に開花したメンデル遺伝学の再発見者と出会い、論文の内容ばかりでなく、直接、人物を通じてのメンデル遺伝の日本への導入に関与した事例と捉えられるということです。

第9章 国立遺伝学研究所の設立前後（溝口）

292	609D	National Institute of Genetics Animal Genetics 1956-1961
	609D	National Institute of Genetics Kihara, Hitoshi 1962-1963
	609D	National Institute of Genetics Library 1955-1958
	609D	National Institute of Genetics Matsumura, Seiji 1958
	609D	National Institute of Genetics Okino, Hiroko Morishima 1966-1967, 1970
101	609D	National Institute of Genetics Rice Studies 1957-1966
	609D	National Institute of Genetics Rice Studies Oka, Hikoy Ichi 1955, 1957-1959 (CLOSED MATERIAL WITHIN)
	609D	National Institute of Genetics Rice Studies Reports 1951-1961

これは私の本日の話の最初に申しましたアメリカ・ニューヨーク郊外にあるロックフェラー財団アーカイブが作成し所蔵している日本への助成金リストの一部です。ロックフェラー財団が遺伝研にサポートしたときの文書の番号がこのような形（上から2番目に木原均、1962年から63年）で記されていたことを提示させていただきました。

これを遺伝研側の「年報」などの資料と照合させますと、遺伝研の年報には、1957年から1962年まで、「栽培稲の起源に関する研究」として、12,5000ドルの研究費を得て、研究が継続されたと述べております。しかし、ロックフェラー側の資料では、ごらんのように「National Institute of Genetics Rice Studies 1957 1966」と記されております。ロックフェラー財団からの助成を期間がロックフェラー側の資料よりも短く載せられております。つまり、このことは、遺伝研の年報に記されている以上にロックフェラー財団は、所員個人あるいは機関として遺伝研に対してサポートをしていた可能性があるということがわかります。

第 II 部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

森脇大五郎（第三代遺伝研所長）

こうして初代所長小熊、2代所長木原の時代を経て遺伝研は落ち着いて研究活動にまい進することができるようになってまいりました。また、日本の研究レベルも国際水準に達したと評価されるようになりました。もっとも、日本では大学紛争が激しい頃でしたが、このような雰囲気での 1960 年代末から 1970 年代半ばの所長が第 3 代の森脇大五郎です。

第八高等学校を経て

1929 年 東京帝国大学理学部動物学科卒業、卒論指導は谷津直秀
テーマは「モノアラガイの呼吸」

1929 年 東京府立第一中学校教諭

1931 年 東京府立高等学校教授。今井喜孝と出会う。今井はモーガンの門下。
谷津の薦めから、今井の下で遺伝研究に従事

1949 年 東京都立大学教授

1969 年 東京都立大学定年退職
国立遺伝学研究所所長（在任期間：1969 年 4 月 1 日～1975 年 2 月 28 日）

東京都立大学理学部生物学科で遺伝学を担当し、定年退職された直後から遺伝研の所長に就任しております。森脇は、さきほども述べました 1933 年に遺伝学の領域で最初にノーベル賞を受賞したコロンビア大学在籍時代のモーガンの下で学んだ今井喜孝から東京都立大学の前身の東京府立高校時代に指導を受けました。もっとも、今井の研究材料は朝顔でした。また、森脇の東京帝国大学時代の恩師、谷津直秀も世紀の変わり目の今井とほぼ同時期に渡米してモーガンが教鞭をとっていたコロンビア大学で学んだ人物です。谷津の恩師は、ウィルソンでした。谷津は、アメリカで実験発生学を身に付けて帰国し、日本に実験的研究の基盤を構築した人物として評価されております。

つまり、森脇は大学時代の指導教官であった谷津直秀も、卒業後、勤務した旧制高校の上司、今井喜孝もモーガンの下で学んでおり、かつ谷津と今井は懇意という関係の中で過ごしていたということです。森脇はクロショウジョウバエという実験材料を使ったモーガン流の遺伝学に非常に力を入れた環境で研究を続け、戦前から日本におけるショウジョウバエ遺伝学のパイオニアでした。このような経歴の森脇が遺伝研の第 3 代所長となり、ショウジョウバエをつかった日本の遺伝研究は世界のトップレベルといわれております。その中では、ショウジョウバエの眼の色素の研究に取り組んだ吉川秀男らの研究が国際的にもよく知られております。非常に優秀な遺伝研究者が森脇所長の時代に在籍しておりました。

まとめ

さて、時間もまいりましたのでこれまでにお話させていただいたことをまとめてみたいとおもいます。つぎのようになります。

戦前は、優生運動・優生思想が高まる機運と呼応して優生学・遺伝学研究所の設置が叫ばれる。小熊による提唱はその発端ではなく、こうした雰囲気の一環と捉えられる。

設立へ向けては、自由な研究の推進と国家への貢献とのギリギリのせめぎ合いで構想についての議論が進められた。

敗戦直後からの、GHQ-SCAP/PHW や ABCC との関わりが比較的濃密でなかったこと、遺伝学自体が理、農、医学部を跨いでいたこと等が研究所創設には幸いであった。

ミチューリン・ルイセンコ論争では、人脈、バランス感覚を発揮。ロックフェラー財団からの助成を含めてアメリカ寄りに。

初期の所長、小熊（研究所の新設）、木原（国際化）、森脇（通常科学化）らの経歴、パーソナリティも役割と関係。

初代所長の小熊は、戦前の1930年代半ばには、遺伝学の成果は、新たな育種学と連携して、「優秀なる民族形成」と関係する。遺伝学専門の研究所を設立する必要性として、我が国には遺伝学者は比較的多数いるが、その成果は外国と比べるといまひとつである。研究者を1箇所に集中させて「吾国に於ける遺伝学を諸外国に対して指導的位置に立たしめる」、これにより文化の向上や国運の発展に寄与できる、などと考えておりました。このことは、戦時下にあって、一方では国家に協力するスタンスをみせながら、一方で距離を置くというか研究者のエートを優先した研究に専念する構えが感じられます。

戦後の設立に際しての占領軍、具体的には連合国軍最高司令総司令部（GHQ/SCAP）との関係ですが、実はGHQ/SCAPの公衆衛生福祉局（PHW）と遺伝研は思ったほど関係があるようにはみえません。このPHWでは、看護教育や医学教育の改革に取り組んでおりましたが、この部局と関わっていたら、研究所の構想について、様々な注文がついて、多分、設立ができなかったかもしれないと感じております。

また、原爆被害調査委員会（ABCC）との関係ですが、設立時のGHQ/SCAPの遺伝研への対応をみまると、遺伝研の設置認可が原爆被害調査を念頭に置いたものとは見えません。遺伝研が原爆に対する調査研究連絡協議会の総括部会へ委員を派遣したのは1954年度からでした。また、1950年代半ばから「生物に対する物理的・化学的刺激による当然変異に関する研究」に取り組んでおりました。しかし、放射線と生物の関係を本格的に研究するようになったのは、科学技術庁の原子力予算が付いた

第 II 部 シンポジウム「研究機関の資料保存と歴史研究」

1957 年から「ネズミにおける放射線の遺伝におよぼす影響」や 1960 年から「植物における放射線の障害変異に関する研究」からだと思っております。はっきりした証拠があるわけではありませんが、アメリカにとっては、放射線の影響などというものは自分たちで調べなければならぬもので、一応の調査が日本人によって行われてはいたものの、日本の遺伝学者たちに任せられるものではないと考えていたかもしれません。結局、遺伝研の独自性ということを考えますと、遺伝研の設立時に GHQ/SCAP の PHW や ABCC との関係が濃密とは見えなかったことが過剰な期待をかけられずにすみ、幸いしたのではないかと考えております。

それから、遺伝研が国立の研究所となる前にミチューリン・ルイセンコ論争という戦後の生物学史でもっとも有名な出来事の大勢の方向がみえてきておりました。実際、メンデル・モルガン遺伝学こそ、遺伝学の本道だと考えている研究者が遺伝研の所員として就任いたしております。また、第 2 代所長の木原均と個人的なつながりを活用して、ロックフェラー財団からの資金提供を得ました。そして、栽培稲の起源を明らかにする研究に使うための温室の建設やセイロン等への現地調査がプロジェクトでおこなわれました。こうした経験を踏まえ、森脇第 3 代所長の時代は、遺伝研究がルーティン化し、日常業務として営まれる「通常科学化」が推進されるようになったと捉えております。こうしてみると、遺伝研の設立と初期の立ち上がりには、小熊、木原、森脇という最初の 3 代の所長の経歴やパーソナリティーも大きく関係しているのではないかと思います。

このようなことを予備知識として、遺伝研関係者に対するオーラルヒストリーを実施すれば、少しは引き出せるものがあるのではないかと想像して話題提供をさせていただきました。

以上です。ありがとうございました。